

楊逸さんが第 139 回芥川賞を受賞

受賞作「時が滲む朝」 中国人女性作家としては史上初



本学出身の楊逸さんが、第139回芥川賞を受賞しました。楊さんは、中国黒龍江省ハルビン出身。1987年、大学4年生のときに来日、働きながら日本語学校に通って日本語を勉強し、本学文教育学部地理学科（当時）に入学しました。来日してからは、日本語の小説を読みあさり、1995年に本学を卒業、その後は中国語新聞の記者や中国語の講師として勤めるかたわら、多くのエッセイや詩、小説を執筆。日本語で書いた『ワンちゃん』（初出『文學界』2007年12月号、のち文藝春秋刊）で第105回文學界新人賞を受賞、芥川賞候補となりましたが惜しくも落選。今回、2度目のノミネートで受賞となりました。中国人女性作家としては史上初の受賞です。

受賞作『時が滲む朝』（初出『文學界』2008年6月号、のち文藝春秋刊）は、天安門事件をモチーフに、中国における青春群像を描いたもの。8月22日、東京會館での授賞式では、1300人の参会者を前に、「受賞を機に日本にとけこんだよう」と喜びを語られました。



授賞式に先立ち、本学主催の国際シンポジウム「21世紀に生きる女子大学」（7月19日開催）に際して、楊さんから母校にメッセージが送られました。（以下は、本学理事・副学長内田伸子教授によるインタビューの抄録）

Q：本学で学ばれたことについて、どのような感想をお持ちですか？

A：当時、中国はとても貧しく、すばらしい勢いで発展を遂げている日本に憧れを抱いておりました。それで、大好きな日本、それもお茶の水女子大学への留学のチャンスが巡ってきたとき、迷わず、中国の大学を中退し、お茶の水女子大学に留学いたしました。

留学はしましたが、生活が苦しく、アルバイトと学業の両立にとっても苦労しましたが、若さで乗り切りました。

地理学を4年間専攻できたおかげで、グローバル世界で生きる意味を見つけることができました。お茶の水女子大学の教授陣は高いレベルの研究者であり、少人数で懇切丁寧なご指導を受けることができました。

21名のこぢんまりとしたクラスでは、優秀な級友たちと学びを共にでき、とても楽しかったです。最初は日本語で苦労し、ゼミでもわからないことがたくさんありましたが、日本語チューターのサポートを得て、だんだん内容がわかってきました。

地理学科では、1年生で1泊2日、2年生で2泊3日、3年生で3泊4日のフィールドワークがありました。四国の百川（ももご）村、山形県の米沢市農村部、横浜市のみなとみらいの開発中のプロジェクトの調査をしました。普通の外国人では接することのできないような農村部や開発中のプロジェクトを調査できたのは幸運でしたし、日本の発展の歴史や日本文化の奥深いところに触れ、日本を知ることができたという実感をえたことは、その後の私の人生においてかけがえのない財産となりました。本当に感謝しております。

Q：女子大学の意義について、どのようにお考えですか？

A：私の学生時代にも、お茶の水女子大学が統廃合されるとか、共学大学になるという噂が学生たちの間で囁かれており、とても心配しておりました。日本やアジアの国々（中国にはありませんが）で女子大学があるのには理由があると思います。芥川賞や直木賞の受賞者は、昨年も今年も女性で、女性が元気になってきたと言われていました。しかし、政界や学術の世界では、まだまだ女性の進出が欧米諸国に比べて少ないのではないかと思います。女子大学という環境で、男性社会に男性と伍して戦えるエネルギーと実力をしっかり身につける必要がある段階にあります。だからこそ女子大学は存在しているのです。歴史と伝統のある母校には、ぜひともその先頭に立ち、世の中を変えていただきたいと願っています。

Q：留学生のみなさんへのメッセージをお願いします。

A：留学生にとっては、異文化に暮らすということでのいろいろな試練があると思いますが、とても辛いこともたくさんあった私がここまでこれたのですから、元気で頑張ってほしいと思います。若いときの苦労は将来の糧になります。苦労を将来の糧にするよう、心より願っております。

楊逸さんが第139回芥川賞を受賞